第 52 回インナーゼミナール大会

研究計画書

ゼミ名	寺尾ゼミ	チーム名	TERAO×FAMILY
タイトル	なぜ人は働かなければならないのか		
テーマ群	a) 理論・情報		
メンバー	大森 涼・藤永 涼・石川 皓己・石塚 耀太・伊藤 悠介・大野 駿介・沖本 翔・加村 悠宇・首田尾 美緒・小西 祐太郎・清水 愛・竹村 翼・中安 繰美・野口 幹太・林 昂平・伴 一志・山路 広大・山名 悠斗・吉井 凜・吉澤 健策・吉本 敦紀		
研究計画内容	【研究の背景と目的】 世の中には新しいものや便利なものが次々に登場し、私たちの暮らし方や生き方も変化を重ねている。新しい仕事や職業が生まれる一方で、廃れる職業や消滅する仕事がある。そうしたなかでも、決して変わらない事実が一つある。それは、「人は働かなければならない」という事実である。2020 年以降における新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大によって、世界はコロナ以前とコロナ以後に分かたれることになった。しかしながら、「人は働かなければならない」という事実は、そのことから何ら影響を受けていない。これらのことをふまえて、「人は働かなければならない」という事実から出発して、「いったいどのような理由と仕組みによって、人が働かなければならないような世の中になっているのか？」「人は、働かなければならない代わりに、何はしなくてもよいのか？」という問題を解明することが、私たちの研究の目的である。 【研究の対象と方法】 通常、労働経済学においては、「人は働かなければならない」という事実は所与とされる。労働経済学は、労働市場が存在することを所与としている研究分野だからである。それゆえ、労働経済学における基礎的な問いは、「人が働くことに影響を与えるのは何か？」というものであり、そこにおいては、「人が働く」という事実は所与とされている。それに対して、私たちが明らかにしたいことは、「人は働かなければならない」という事実の原因とその効果である。そこで私たちは、今回の研究において、「人は働かなければならない」という事実の原因とその効果について、(1) その事実によって個人レベルで実現されることは何であるのか、(2) その事実によって社会レベルで実現されることは何であるのか という 2 つの観点から、実際のデータをふまえながら理論的に考察する。 【期待される成果】 今回の私たちの研究によって、労働経済学においては分析対象として通常取り上げられることのない「なぜ人は働かなければならないのか、働くべきなのか」という事実の原因とその効果が明らかにされる。その際に結論として導き出される命題の一例は、「個人レベルで考察する場合には『働かない方が得である』と結論付けられるケースであっても、社会レベルで考察する場合には『働いた方が得である』と結論付けられることになる」というものである。		